

【研究書紹介】

沼本克明著 『帰納と演繹との  
はざまに揺れ動く字音仮名遣いを論ず  
―字音仮名遣い入門―』

佐々木 勇

○ 本書紹介の意図

本書は、書名に「字音仮名遣い入門」の副題が添えられ、「はしがき ―本書の意図―」に「日本人の共通問題としてこの問題の核心的な部分が揺れにあるという事実を字音研究の立場で入門書として説明してみようとする」とある。

本書を読むことで、辞書によって、また教科書によって、あるいは、同じ出版社の教科書でも漢文と古文とで、字音仮名遣いが異なることがあるのはなぜか、が理解される。

本書の書名から、「字音仮名遣い」が抱える問題を、わかりやすく説いた啓蒙的な書と判断されることであろう。

そのため、国語学・日本語学関係の学術雑誌における書評対象となることは、おそらく無いものと思われる。

しかし、この書には、あるいは、著者の意図に反して、きわめて専門的で最新の研究成果が盛り込まれている。貴重な誌面を頂いて、この書を紹介する所以である。

一 本書の構成

本書の目次は、次のとおりである。

はじめに

導入論 和語の歴史的仮名遣いと字音の歴史的仮名遣い

一、歴史的仮名遣い 二、字音仮名遣い

三、字音仮名遣いと韻鏡 四、字音仮名遣いの問題点

第一章 中国漢字音と日本漢字音

《第一章の要旨》

第一節 日本漢字音の諸層と特徴

第二節 中国漢字音と日本漢字音の対応関係

第二章 宣長大人の『字音仮字用格』

《第二章の要旨》

第一節 本居宣長の『字音仮字用格』

第二節 『字音仮字用格』の原理

第三節 「字音仮名遣い」への批判と改訂の方向

第四節 「字音仮名遣い」の残された問題点

第三章 呉音と字音仮名遣い

《第三章の要旨》

第一節 呉音の分布とその意味

第二節 呉音の祖系音

第三節 呉音の非体系性 — 演繹法は適用可能か —  
第四章 漢音と字音仮名遣い

《第四章の要旨》

第一節 漢音の祖系音を探る

第二節 漢音の体系と字音仮名遣いの決定法

第五章 字音仮名遣いの周辺

《第五章の要旨》

第一節 撥音韻尾の歴史と字音仮名遣い

第二節 「月」字の仮名表記史と字音仮名遣い

結 語

本文注

主要参考文献

要語索引

あとがき

右の目次に従い、旧著・旧稿の必要部分を、資料・用例を厳選してわかりやすく組み直し、新資料も加えて、この度の新著としている。各章の表紙扉裏に記された各章の「要旨」が、読者の理解を助ける。

二 漢字音研究に関する指摘

本書全体を通じて、字音仮名遣いを定める基礎となる、日本漢字音史を、かつての自著をまとめたおす形で確認されている。著者は、日本漢字音の歴史全体を、自著の引用のみで描くことができる。

引用に際しては、45頁以下の呉音例・漢音例の対照表を、『日本漢字音の歴史』（一九八六年、東京堂出版）28頁以降のものを集め、入声韻に対応する平上去声韻の下に組み込み、全体像を捉えやすくするなど、細かな工夫がなされている。

ただし、本書は、著者が既発表論文や旧著で説いてきたことを、より鮮明・簡明に再説しただけの啓蒙書ではない。

旧稿を引用した部分であっても、表現の変化・前進が認められる。たとえば、第四章第一節第一項「中古音の侯韻明母字の模韻化と漢音」「三、我が国撰述の辞書類における侯韻字の反切」は、沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（一九八二年、武蔵野書院）の第二部第三章第一節「漢音に於る侯韻明母字の問題」を基とする。その前著の「と解釈するのが妥当ではあるまいか。」が、今回の著書では「と解釈すべきであろう。」に変えられている。

また、233頁で、朝鮮漢字音の母胎音は日本漢音よりわずかに後の体系を反映する、とする箇所も、旧著『日本漢字音の歴史的研究』（一九九七年、汲古書院）三六〇頁では、「時間的なずれがそこに反映していると解釈できるのではなからうか。」という婉曲な表現であったものが、「時間的なずれと見られるのではないか。」（新著233頁）に変更されている。

数十年前の自説をほぼそのまま引いて、新著を書き上げられることが、まず、驚きである。

そして、わずかな表現の変更であるとも感じられるこれらの修正は、その後数十年間の研究で、自説の妥当性を確信できたことを示しているもの、と思われる。

三 「字音仮名遣い」についての本書の要点

以下、本書から引用する形で、「字音仮名遣い」に関する本書の要点をまとめる。

左は、本書全体から、一文ずつを抜き出して繋げたものに過ぎない。詳しくは、本書の精読をお願いしたい。

## 0. 「字音仮名遣い」を扱う立場

「字音仮名遣い」をどういう立場から扱うかという基本的立場は色々あり得るという前提は認めた上で、本書は和語の「歴史的仮名遣い」と対概念ツイガイネンになるものを追究するという立場に立っている。」(252頁)

### 1. 「呉音」の字音仮名遣い

呉音は、「朝鮮半島經由の百済・新羅仏教の仏典読誦音として伝来したと推定される」(126頁)。「全ての漢字に呉音があるというのは錯覚である」(188頁)。

「呉音は『切韻』よりもやや古い方言的性格を有する部分を持つ音韻体系を母胎としたことが推定できる」(187頁)。ところが、「そのような音韻体系を示す韻書も音義も辞書も、全く存在しない」(187頁)。

そのため、「呉音」の字音仮名遣い決定に際しては、「演繹論法は適用不可能である」(292頁)。

しかし、「呉音は仏典読誦音を基盤にしてそこに現れる二〇〇〇字程に限定しても実用上には支障がない」(252頁)。

### 2. 「漢音」の字音仮名遣い

漢音は、「実例の帰納論法によつて母胎音が秦音であると措定できるために」(292頁)、「帰納的に仮名遣いが決定できないものについては、秦音による演繹法を適用すべきである」(252頁)。

ただし、『慧琳一切経音義』の分析から知られる「秦音による演繹法を適用」してもなお、「全ての漢字に正しい漢音の仮名遣いを提示することは不可能である」(292頁)。

右を要するに、以下のとおりである。

「和語の「歴史的仮名遣い」と対概念ツイガイネンになるもの」として捉える「字音仮名遣い」は、古訓点資料・辞書・音義等から具体的な仮名書き例を集め、それらの用例から帰納することによって定められるべきである。しかし、「全ての漢字に用例を指摘することは不可能である」(23頁)。

そのため、漢音については、演繹法も適用すべきである。

一方、呉音は、母胎音を措定できないため、演繹法を適用できない。

残存資料の悉皆調査が完了したとしても、全漢字の呉音・漢音は探し出せない、と誰よりも多くの漢字音文献調査をした著者に明記されると、漢音における演繹法適用の必要性が納得できる。

ただし、現行の漢和辞典においてすべての漢字に付されている「漢音」についても、「全ての漢字に正しい漢音の仮名遣いを提示することは不可能である。そういう曖昧さが残るのが字音仮名遣いの本質なのであって、帰納論と演繹論のはざまとは、帰納論法を究極まで追究することによつても、演繹論法を究極にまで追究することによつても、結局は百パーセント正しい仮名遣いを提示することは不可能である」というもどかしい問題であることを言う表現なのである。」(292頁)

## 四 「字音仮名遣い」についての新提案

ここでも、簡条的に引用する。

①「字音仮名遣いと対ツイになる和語の歴史的仮名遣いは、大旨平安時代前半期(特に九五〇〜一〇〇〇年間)の例が拠り所になっていると言えるが、実は字音仮名遣いの場合には、必ずしもその時代の実例を根拠とすることが出来るとは言えないのである。(中略)このような場合には一定の時代の例によつて字音仮名遣いを決定

することは妥当ではない。即ち、時代別の記述を行う必要も出て来る」(121頁)。

② 梗撰四等字(清・青韻字)の呉音が、中心母音ア列であることについては、沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(一九八二年、武蔵野書院)ですでに指摘されている。本書では、清・青二韻に属する諸字について、「漢音は㊸イ、呉音は㊸ヤウ・㊸ウ」は例外なく言い得る」(177頁)、として、『廣韻』『韻鏡』に基づいて仮名遣いを決定できることを述べている。

③ 同じく、豪韻唇音字が㊸ウであることも、漢音・呉音とも徹底的であり、『廣韻』『韻鏡』に基づいて仮名遣いを決定できることを述べる。(177頁)

④ 「字音仮名遣いとして」㊸をンで、㊸をムが書き分ける辞典類が出現し始めた。然し「㊸及び㊸」を書き分けようとする試みが皆無なのは残念なことである。「 $u \cdot u \cdot u \cdot u \cdot u$ 」を書き分けて区別することによって、「オンミョウジ(陰陽師)」がなぜ「オンニョウジ(オンニョウジ(陰陽師))へ変化したのか、「東西」がなぜ「トウザイ」と連濁し、「東京」はなぜ「トウキョウ」と連濁しないか、など知的興味の範囲は拡大するはずである。」(268頁)

⑤ 「字音仮名遣いの提示においては、呉音・漢音の片仮名表記形のほかに、最低の情報として、該当字の『広韻』(拡大する場合は『集韻』等)の反切とその声母韻母、『慧琳音義』によって再構できる秦音体系の声母と韻母情報は付け加えておくべきであろう。」

(293頁)

⑥ 「今後字音仮名遣い辞典の様なものが試みられて良いであろう。現今、流れとしては漢音・呉音に平安時代の具体的な資料に見られる字音仮名遣いを採用したと謳う辞典類も出現し始めているのは、進歩と言えるではあるが、筆者の関与した辞典でもその具体的な資料の字音仮名遣いとする例が、いつ頃の如何なる資料なのか具体的に遡源出来ない大雑把な段階にまだ留まっているのが現状である。」(293頁)

最後の項目、出典を明記した「字音仮名遣い辞典」あるいは声調の情報をも加えた「日本漢字音史辞典」の作成は、後の研究者への、著者からの宿題である。

(二〇一四年四月二十五日 汲古書院 A5判 312頁 3000円+税)

〔付記〕

本書の著者沼本克明先生は、二〇一四年三月十一日に他界された。先生は、この本の最終校正刷りを、逝去の前日三月十日に出版社に送付された、と奥様からうかがった。

(広島大学)